

## 2. ロシア、オスマン帝国、清朝と国際秩序の変容

日時：2009年5月25日(月) 18時～20時30分

場所：学士会館309室

報告者：黛秋津（第4班プロジェクト研究員）、野田仁（早稲田大学）

この研究会は、ユーラシア大陸の東西に近代帝國的な支配秩序や近代国際システムが浸透していく過程を、ロシア帝国の役割を共通項としながら比較することを目的とした。

黛報告の後の議論では、附庸国を管轄する官庁の有無など、オスマン帝国の周辺支配に関するいくつかの事実確認が行われたのち、ロシアと西欧諸国のオスマン帝国への進出と、それに伴うオスマン帝国の秩序観の変化について質問があった。それに対し報告者からは、条約締結や交渉の進め方、そして西欧・ロシア側君主の称号などに関して、17世紀末以降18世紀にかけてオスマン側が修正を迫られ、その様式が変化したことが述べられた。また参加者から、東アジアなどの例では西欧諸国の進出によって帝国の中央＝周辺関係の変容が直ちに生じるわけではないことから、18世紀後半以降のオスマン・両公国関係の変容も、より長いタイムスパンの中で見る必要があるのではないか、といったコメントがなされた。また近代におけるロシアの役割に関しては、イスラーム世界や東アジア世界に対する陸上型帝国としてのインパクトの強さが、イギリスやフランスなどの海洋型帝国のそれよりも勝っており、それ故ロシアはユーラシアでの近代国際システム形成に大きな役割を果たしたのではないか、という意見が出された。その他、ロシアが宗主側主導の曖昧なオスマン・両公国関係に、明確な条約関係という法的な枠組みをはめようとする、一見近代的に思われる行為の意味や、オスマン・ワラキア関係とオスマン・モルドヴァ関係を同列に扱うことの妥当性などが議論の対象となった。

野田報告に対してもさまざまな視点から質問が寄せられた。清朝に関しては、朝貢システム論を当てはめることの是非が問われ、またカザフの「朝貢」と貿易との関係について疑問が寄せられた。ロシア側の視点からは、カザフ・アルタイなどの状況とコーカンド以南をどこまで一括りにして考察し得るのかという疑問があり、これらは今後の課題として検討を続けることになる。より大きな視点では、2つの帝国間における諸集団の動向が、翻って帝国側にどのようなインパクトを与えていたのかという問いがあり、前半の黛報告と併せて、さらに比較を行うことが求められよう。

## 18世紀後半のワラキア・モルドヴァ両公国をめぐる国際関係の変容 — オスマン帝国の中央＝周辺関係に注目して —

黛 秋津

### 0. はじめに

- ・報告者の問題関心 — 近代以降西欧を中心として地球を覆う一つのシステムが形成される中、他の「文化世界」「文明圏」としての帝国（「世界」帝国）はいかなる過程を経てそのシステムに加わり、あるいは加えられていったのか？（近代国際システム形成過程における帝国）またその過程において、帝国の周縁ではどのような変化が生じ、また帝国の周縁ではどのような役割を果たしたのか？（近代における帝国秩序の再編成）
- ・本報告のねらい — 上の問題関心に基づき、その一つの例として、イスラーム的「世界」帝国であるオスマン帝国が近代国際システムへ参加して行く18世紀後半の時期の、オスマン帝国の附庸国であったワラキアとモルドヴァの二つの公国に焦点を当てる。特に①西欧諸国・ロシア・オスマン帝国間の力関係の変化と、それに対応して生じたオスマン・両公国の宗主・附庸関係の変化、②オスマン帝国とロシア帝国という二つの巨大「世界」帝国の、西欧国際システムへの統合初期における、同地域が果たしたインターフェイスとしての役割、に注目

### 1. オスマン帝国の周縁としてのワラキア・モルドヴァ両公国

- ・オスマン帝国の附庸国 — ワラキア・モルドヴァ、トランシルヴァニア、ラゲーザ、クリム・ハーン国、ヒジャーズ、西グルジアなど — それぞれに中央との権利・義務諸関係が異なり、中心からの支配の強弱が異なる。Ex. ラゲーザ、トランシルヴァニアは弱。ワラキア・モルドヴァは強
- ・オスマン帝国にとってのバルカン — 中核と周縁を併せ持つ地域。中核としてのルメリと周縁としてのワラキア・モルドヴァ
- ・ワラキアは15世紀半ば、モルドヴァは16世紀前半にオスマン帝国に従属—イスタンブルへの食糧供給基地としての位置づけ
- ・他のバルカン地域と異なり、何故オスマン帝国は両公国を併合しなかったのか？ — ルーマニアでの論争→取引費用の問題？
- ・17世紀末の宗主・附庸関係の動揺と18世紀初頭のファナリオット制度導入。すなわち、現地選出の公を中央政府が任命することを止め、中央政府が選出した、主にギリシア系の正教徒有力者階層の人物をイスタンブルから派遣→両公国をめぐる国際関係の変化に対応する中央による中間支配の強化

## 2. ロシア、オスマン帝国、清朝と国際秩序の変容

- ・ロシア側にとっての両公国：17世紀半ば—ウクライナの背後にあるモルドヴァの戦略的重要性。17世紀末—ピョートルによるアゾフ進出により、ロシアのバルカン進出が現実味→1710—11プルト戦争において、モルドヴァ公とロシアの密約。正教徒の保護者としてのロシアのアピール。しかし正教徒住民の積極的な協力は得られず、戦争に敗北。18世紀前半—両公国への進出を目標としつつも、具体的な動きはほとんどなし

## 2. 西欧・ロシア・オスマン帝国関係の変容の出発点としてのキュチュク・カイナルジャ条約

- ・17世紀末のオスマン帝国をめぐる国際関係の変容：1699年のカルロヴィッツ条約によりオスマンの優位からロシア・ハプスブルク・オスマン三帝国間の勢力均衡へ—しかしその後もワラキアとモルドヴァはオスマン帝国内の問題として外交問題とはならず
- ・1768年ロシア・オスマン戦争—ロシアの軍事的圧勝。両公国でも支配者・住民ともにロシアに期待し、両公国はロシア軍の占領下にな→ハプスブルク帝国とプロイセンが交渉の仲介者として介入→ロシアは両公国返還を受け入れ
- ・ロシア・オスマン間の和平交渉中のワラキア・モルドヴァ問題—ラグーザ型宗主・付庸関係か（ロシアの提示した和平草案）、現状維持か（オスマン側の主張）
- ・1774年7月キュチュク・カイナルジャ条約締結—黒海周辺地域でロシアはいくつかの権利を獲得し、両公国に関しては（条約第16条）、「ラグーザ」の語は外されるも、ロシアは両公国内政への「発言権」を獲得。同時にロシアの傀儡が終身モルドヴァ公位にな—オスマン帝国の中央=周辺関係への楔→以降、西欧・ロシア・オスマン関係は静から動へ

## 3. 1774年後の国際関係の変容とオスマン・両公国関係

- ・オスマン・両公国関係へのロシアの介入の開始：公の頻繁な交替の阻止、両公国からイスタンブルへ支払われる諸税の金額の明示などを要求—オスマンの中央=周辺関係への挑戦→1784年の誓約にて実現。しかし実際には守られず
- ・1780年頃からは、ドナウ・黒海進出を目指すハプスブルク帝国もロシアに加わる。例えば、両公国における領事館設置問題
- ・フランス革命後の1790年代前半に新たな展開。共和国フランスのバルカン・黒海進出。イギリスも関心→両公国はイギリス・フランス・ロシア・オスマン帝国間の問題へ。特にフランスの影響力の増大

## 4. 1802年の勅令の意義

- ・1798年フランスのエジプト侵攻による、オスマン外交の大きな方針転換→ロシア・オス

#### マン同盟の成立

- ・一方で、オスマン帝国内ではバルカンの混乱と無政府状態→バルカンの正教徒たちは、混乱の解消と治安維持のためロシアの出兵を期待→ロシアはオスマン政府に対し、両公国の地位待遇改善のための圧力
- ・1802年9月オスマン政府から両公国へ勅令発布。この勅令は、オスマン・両公国関係を規定する、事実上のロシア・オスマン間の外交条約（ロシアは「批准」を行う）→1802年の勅令は、1829年のアドリアノーブル条約まで、オスマン・両公国関係を規定する法となる
- ・その後この勅令は、その内容に不満なオスマン政府とロシアとの同盟解消を狙うフランスの標的に→1806年ロシア・オスマン戦争へ

### 5. まとめと展望

- ・18世紀半ばまで、オスマン・両公国間の中央＝周辺関係は、17世紀末に動揺しつつも維持されていたが、1774年を境に変容を余儀なくされた
- ・住民のほとんどが正教徒であるというワラキア・モルドヴァの有する条件が、特に18世紀以降、オスマン帝国からの遠心力、ロシアへの引力として働く→しかしロシアの吸引力は、そのままロシア帝国の拡大には直接つながらず、同時に生ずる西欧諸国の関与によって複雑で多様な諸関係が構築されてゆく→西欧・ロシア・オスマン帝国間の諸関係の緊密化→結果として西欧国際システムの拡大へ、という流れ
- ・近代国際システム、さらに現代グローバルシステム形成におけるロシア帝国の役割——ロシアの拡大とそれと同時に生じる西欧の関与（主にイギリス帝国）による他の「世界」の統合という流れは、イラン、アフガニスタン、東アジア、など他の地域ではどうなのか？ロシアの役割の大きさは、地理的な近さなどの特別な条件を備えたバルカンの特殊事情か、あるいは程度の差はあれ、近代のユーラシアにかなり広く認められるものなのか→西欧とロシアは車の両輪？

#### 主な参考文献

- ・Akiba, Jun, “Preliminaries to a Comparative History of the Russian and Ottoman Empires: Perspectives from Ottoman Studies,” in Matsuzato, Kimitaka, ed., *Imperiology: From Empirical Knowledge to Discussing the Russian Empire*, Sapporo: Slavic Research Center, 2007, pp. 33-47.
- ・Anderson, M. S., *The Eastern Question 1774-1923: A Study in International Relations*, London: Macmillan, 1966.
- ・Bull, Hedley & Watson, Adam, eds., *The Expansion of International Society*, Oxford: Oxford University Press, 1984.

- Barkey, Karen, *Empire of Difference: The Ottomans in Comparative Perspective*, New York: Cambridge University Press, 2008.
- Karpat, Kemal H., and Zens, Robert W., eds., *Ottoman Borderlands: Issues, Personalities and Political Changes*, Madison: The University of Wisconsin Press, 2003.
- Köse, Osman, *1774 Küçük Kaynarca Andlaşması (Oluşumu-Tahlili-Tatbiki)*, Ankara, 2006.
- LeDonne, John P., *The Russian Empire and the World, 1700-1917: The Geopolitics of Expansion and Containment*, Oxford University Press, 1997.
- Lieven, Dominic, *Empire: the Russian Empire and Its Rivals*, London, 2000. (ドミニク・リーヴェン著、松井秀和訳、『帝国の興亡』上下巻、日本経済新聞社、2002年)
- Mayuzumi, Akitsu, "Issues pertaining to Wallachian and Moldavian *voyvodas* and their effect on Russo-Ottoman relations (1774-1806)," *Japanese Slavic and East European Studies*, vol. 27, 2007.3, pp. 1-31.
- Maxim, Mihai, *L'empire Ottoman au nord du Danube et l'autonomie des Principautés Roumaines au XVIe siècle. Études et documents*, Istanbul: Isis, 1999.
- Panaite, Viorel, *The Ottoman Law of War and Peace: The Ottoman Empire and Tribute Payers*, Boulder: East European Monographs, 2000.
- Roider, Jr., Karl A., *Austria's Eastern Question 1700-1791*, Princeton: Princeton University Press, 1982.
- Sugar, Peter F., *Southeastern Europe under Ottoman Rule, 1354-1804*, Seattle & London: University of Washington Press, 1977.
- Yurdusev, A. Nuri ed., *Ottoman Diplomacy: Conventional or Unconventional?*, New York: Palgrave Macmillan, 2004.
- *Век Екатерины II : Россия и Балканы*, Москва, 1998.
- Дружинина, Е. И., *Кючук-кайнарджийский мир 1774 года (его подготовка и заключение)*, Москва, 1955.
- *Очерки внешнеполитической истории молдавского княжества (последняя треть XIV – начало XIX в.)*, Кишинев, 1987.
- 鈴木董『イスラムの家からバベルの塔へ——オスマン帝国における諸民族の統合と共存』リポート、1993年。
- 鈴木董『オスマン帝国の解体—文化世界と国民国家』ちくま新書、2000年。
- 黛秋津「ロシア・オスマン関係の中のワラキア・モルドヴァ公問題——18世紀後半から19世紀初頭まで——」『史学雑誌』第133編第3号、2004年、pp. 1-33.
- 黛秋津「近代国際システム形成過程におけるロシアとオスマン帝国—ワラキア・モルドヴァ問題を中心に(1768—1806)」(学位論文 博士 2007年9月提出)
- 黛秋津「ロシアのバルカン進出とキュチュク・カイナルジャ条約(1774年)——その意義についての再検討」『ロシア・東欧研究』第37号(2008年度)、2009年、pp. 94-105.

## ロシア帝国の東方国境とカザフ草原 — 清朝の多民族支配との比較から —

野田 仁

本報告は、報告者がおもに扱ってきたカザフ草原の事例（1757～1850年代）に基づき、ユーラシア史において広大な支配領域を有していた二つの帝国、ロシアと清朝に注目し、両者間の長い国境地帯ゾーン（アムールからアフガニスタンまで）における帝国の支配秩序の違いを比較することを目的とする。この作業が可能になるのは、カザフ草原が、境界領域として帝国間の境界・異なるシステムの接合する狭間となっていたからであり、結果として両帝国の接触・衝突の場となったからである。また、報告の中では、「境界」を手がかりとして、両帝国を主とした、内陸アジアにおける国際秩序の変容を考察することも視野に入れていた。

まず、予備的考察として、内陸アジア国際関係史の研究動向を整理し、また清朝における「朝貢システム」論を踏まえカザフ草原が2つの帝国にとって、どのような地位に置かれていたかについて概略を述べた。その中で重要な意味を持つのは、清朝においては、カザフは境界の内外に牧地を持つ存在であり、しかも後にその領域の多くがロシアに属することになる点であると考えられる。そのことが両帝国間に置かれたカザフ草原の立場を定め、またカザフの遊牧地に隣接する新疆北部の境界を流動的なものとしていたからである。

続いて、露清およびカザフの三者の立場の比較を行った。清朝はカルンと呼ばれる哨所を結んだ線を防衛線とし、異民族の管理に当たっていたが、清朝政府におけるカザフ（およびその向こうのロシア）への意識が薄くなっていく過程に並行して、1750年代当初の境界認識は揺らぎ始め、カルン線が境界線になっていくことを示した。その中で「ロシアに帰属するカザフ」という認識も見られるようになったのである。

対するロシアでは、1822年以降、カザフの中ジュズについて「西シベリア」化を進めたが、そのとき設置された管区が、カザフの牧地を帝国に取り込む装置となっていた。清朝がバルハシ湖までのカザフの遊牧地をも自領とみなしていることを知っていたロシアは、清朝に配慮しつつ支配の拡大を進めたが、1830-40年代に、清朝の拘る点を精査した上で、より積極的な方針に転換していたのである。

カザフの立場については、時間の関係でくわしく触れることはできなかったもので、ここまでの考察—おもにカザフ草原をめぐる露清関係に相当—からまとめられることを記しておく。

第一に、この時代の内陸アジアの国際秩序が、ジューンガル政権の崩壊後の「空白」の整理を主にしていることがあり、その点で東北アジアの状況とも併せて論ずる必要がある。

## 2. ロシア、オスマン帝国、清朝と国際秩序の変容

その原因の一つに、内陸アジアにかんする露清間の条約が定められなかったことにあるが、その結果、政治・経済的に閉じていない空間が成立し、またこの空間—ジューンガル旧領のアルタイ、カザフ草原、クルグズ、(コーカンド等)—は露清間の緩衝地帯にもなっていた。

第二に、内陸アジアにおける秩序再編の構造を考えた時に、清朝側から見れば、1820年代以降、北方から新疆への関心を失っていく状況があったと考えられる。その過程で、とくにアルタイ・イルティシュ川上流域における「境界の経験」は、その後新疆南部にも応用され、境界の固定化につながっていったとみなし得る。一方のロシア側から見れば、1836-37年前後から本格的にカザフ草原へ進出する体制が整ったことが見て取れ、この2つの流れの一致が1850年前後における秩序再編への鍵となっていたことは確かである。

第三に、本報告では十分に検討できなかったが、両帝国の辺境統治システムの違いは大きかった。カザフの場合でも、ロシアへの帰属の根拠となる臣籍の宣誓と、清朝との関係の基礎となっていた爵位では、その縛りつける強さはまったく異なっていたと言ってよい。それは、ロシア=カザフ関係における、属人的な関係から属地的把握への移行とも大きく関わっていると考えられる。

※ なお、本報告の内容の一部は、野田仁『露清帝国とカザフ=ハン国』（東京大学出版会、2011年）にも反映されている。カザフ草原をめぐる国際関係史の展開とあわせ、ご参照いただければ幸いである。